



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	G. A リーランドとアメリカン・ボード : 来日米国人宣教師文書及びリーランド書簡 (1880年10月17日付) の分析を通して
Author(s)	大櫃, 敬史
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 107, 25-36
Issue Date	2009-06-22
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.107.25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38706
Type	departmental bulletin paper
File Information	107_002.pdf



G. Aリーランドとアメリカン・ボード

— 来日米国人宣教師文書及びリーランド書簡（1880年10月17日付）の
分析を通して —

大 櫃 敬 史*

G. A. Leland and the American Board

— Analysis of the Correspondences of the American Board
and A Personal Familiar Letter from Japan (October 17, 1880) —

Takashi OBITSU

【目次】

はじめに

1. アマースト大学とアメリカン・ボードの結びつき
2. お雇い外国人教師リーランドの任免を巡るアメリカン・ボードの関与
 - 1) リーランドの招聘
 - 2) リーランドの任免
3. リーランドの明治日本への関心—「キリスト教布教の実態」に関する報告
～「日本からの個人的な親しみのこもった手紙」（1880年10月17日付）
4. S. E. ヘリックとリーランド
 - 1) ヘリック博士について
 - 2) 帰国後の交流

おわりに

【キーワード】 G. A. リーランド, アメリカン・ボード, お雇い外国人教師, キリスト教布教, S. E. ヘリック

はじめに

お雇い外国人教師であったG. A. リーランドをわが国の体操教師として招聘・任免する経緯については、これまで限定された資料に基づいて言及がなされてきている。

本稿では、第一にこれまでほとんど取り上げられることのなかったアメリカン・ボード関係資料を主要な手がかりに、殊にリーランドの任免を巡る経緯について、新たに判明した事実に基づいて明らかにして行く。第二の点は、当時わが国に招聘された数多くのお雇い外国人教師たちが、キリスト教布教に対してどのような感情を抱いていたのか—この時期のキリスト教普及の実態と布教活動について詳細に報告したリーランドの書簡を事例として—取り上げ、

* 北海道大学大学院教育学研究院健康スポーツ科学講座准教授（体育計画〈体育史〉研究グループ）

彼等お雇い外国人教師たちが専門教育を教える傍らキリスト教布教の度合にも深く配慮し、わが国のキリスト教布教のどの様な点に関心を持ち、アメリカ本国に何を伝えようとしたのかを詳しく検証し、この分野で彼等が担った特別な役割を明らかにしようとするものである。

1. アマースト大学とアメリカン・ボードの結びつき

ボストンは学問の都である。新大陸移住後間もない 17 世紀に、早くもハーバード大学が設立されたほどである。当初は会衆派（＝組合派）の男子修道院として創立され、その目的は「イギリス人とインディアンの子供に知育と敬神を教える」こととされていた。この学校を卒業した者はプロテスタントの聖職者になるのがふつうだった。旺盛な知的好奇心は、ニューイングランドの伝統的な信仰にもメスを入れることになる。

大学名	州名	宗派	設立年
ハーヴァード (Harvard)	マサチューセッツ	会衆派	1636年
ウィリアム・メアリー (William & Mary)	ヴァージニア	英国教会	1693年
イェール (Yale)	コネチカット	会衆派	1701年
プリンストン (Princeton)	ニュージャージー	長老派	1746年
コロンビア (Columbia)	ニューヨーク	英国教会	1754年
ペンシルヴェニア (Pennsylvania)	ペンシルヴェニア		1755年
ブラウン (Brown)	ロードアイランド	バプテスト	1765年
ダートマス (Dartmouth)	ニューハンプシャー	会衆派	1769年
ラトガース (Rutgers)	ニュージャージー	オランダ改革派	1771年

表1 独立前に設立された大学と宗派
(『アメリカ・キリスト教史』より引用)

19 世紀のボストンは、新興のユニテリアン派がボストンの宗教と言われるほどに勢力を広げて来つつあった。ユニテリアン派は、キリストの神格、つまり三位一体の教義を認めないという自由神学の思想を掲げ、組合派に比べて芸術や娯楽に関して寛容であった。1825 年には、アメリカ・ユニテリアン協会が結成されるに伴って、ニューイングランドの教会は続々と組合派から離脱して 1840 年には 135 の教会がユニテリアン派に加盟していった。ハーバード大学も徐々にユニテリアン化し、1838 年にはすでに教授の大半はユニテリアンであったと言われている。結果としてハーバードは当時ユニテリアンの牙城となっていった。

このユニテリアンは社会意識と人道主義の精神が旺盛で、奴隷制廃止にもいち早く乗り出すことになる。エマソンなどの超絶主義者たちも、伝統的なカルヴィン主義に反逆した点でユニテリアン的な傾向を強くしていった。これに対してニューイングランドの伝統的正統派神学を守る立場から 1807 年に創立されたのがアンドーヴァー神学校であり、また 1832 年創立のアマースト大学であった。

19 世紀の中葉には、アマースト大学は聖職者を最も沢山輩出した大学であったと言われて

いる。とくに 1868 年新島襄が在学した当時のアマースト大学の学生数と、陪餐会員数、牧師志願者数、宣教師志願者数について興味深い統計を、北垣宗治はホランド文書*のなかで指摘を¹⁾している。

	Seniors	Juniors	Sophomores	Freshmen	Total
No. in class	56	56	70	65	247
No. of Communicants	43	37	47	44	171
No. of Non-Communicants	13	19	23	21	76
Preparing for the Ministry	20	27	22	20	89
Looking toward Mission Field	5	8	6	5	24
【卒業年】	1869	1870	1871	1872	

表 2 RELEGIOUS STATISTICS AMHERST COLLEGE (1868 - 1869)

この表が作成された当時はホランドが四年生、新島が三年生の時の統計であり、新島のクラスは他のクラスに比べて陪餐会員数は少ないが、牧師と宣教師志願者数では断然他のクラスを引き離していることがわかる。

ローバート・ヘンリー・ディヴィス、オーティス・ケーリー・Jr (1851 - 1932)、アーサー・ウィリス・スタンフォード、ホレイテオ・B・ニューウェル、フランク・アランソン・ロンバード、といったアマーストの卒業生はすべてアメリカン・ボードの宣教師であったことから判る様に、アマースト大学とアメリカン・ボードは当時非常に密接な関係にあったともいえる。宣教師たちはしばしばアマーストを訪れて宣教先での体験を語って、若い学生たちを鼓舞したことが、新島やホランドの手紙に反映している。アメリカン・ボードの大会がニューイングランドで開催される時には、アマーストの学生が大挙してそれに参加する習慣があったといわれている。

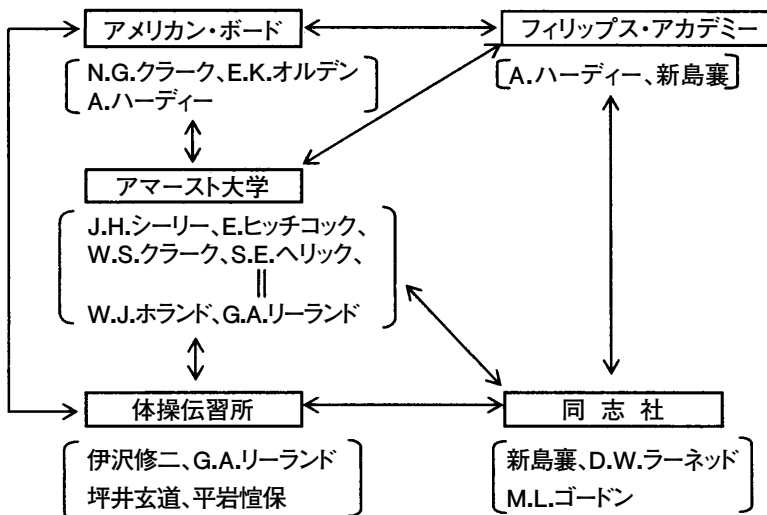


図 1 アマースト・グループとアメリカン・ボードの関係

2. お雇い外国人教師リーランドの任免を巡るアメリカン・ボードの関与

1) リーランドの招聘

コングリゲーションナルの資料を手がかりに詳細な検討を行った安田の最近の研究²⁾によれば、以下の様である。

明治九(1876)年十月五日、アメリカでもっとも由緒ある宣教師海外派遣団体アメリカン・ボードのその年の大会がコネチカット州ハートフォードで開かれた。その大会の壇上に田中不二麿が登場したのである。そのことがアメリカン・ボード幹事をいかに興奮させたか。幹部の一人が、「われわれの歴史の中でもっともスリリングな場面の一つだった」と述べ、明治九(1876)年十一月二日付 以下の様な、日本宛て書簡を送っている。

不二麿はアメリカン・ボードの全面的支援を得て、日本ではじめて体操の指導者としてリーランドという若いお雇い教師を獲得した。ボードが彼を推薦した理由の一つは、「耶蘇教風の高志ある人」ということであった。

ボードの幹部は、日本にいる宣教師に宛て、「不二麿が、ミッションの意向に沿った形で、文部省内で窃かに人員の配置転換を行っている。」と、その興奮ぶりが伝わってくるような手紙を出している。(傍線：筆者)

と述べ、上で指摘した一連の資料を駆使して、これまでの先行研究では取り上げられなかったリーランド招聘に関わる隠れた部分を見事に描き出している。

彼は在任中、生徒の身体発育の測定について優れた統計資料を提供した他に、体操の指導書を作成するなどが国の体育指導の為に多大な貢献をなした。体操伝習所でのリーランドの任期は、当初2年間の約束であったが、日本政府は契約期間を更に1年延長した。

2) リーランドの任免

またリーランドが体操教師の職務を解かれて帰国をする際の経緯に関しては、来日アメリカ人宣教師関係資料の精緻な分析を行った本井の研究が見られる。

1880年9月27日付 M. L. ゴードン書簡³⁾によれば、「1880年秋、日本ミッションはリーランドをミッション専属の医師として採用したい旨の要請を行っていた。医師のゴードンがこの件をリーランドに打診したところ、直ちに職務につき意志がないとの返事が返って来た為に、この件は実現することなく立ち消えとなった。一方ボストンのミッション本部側では、1880年10月2日付 NG. クラーク書簡において、リーランドが日本政府との契約期間を1年間延長した動向をすばやく察知し、ゴードンに対しては、採用は問題外であるとの回答を行っていた」事実が明らかになった。ミッションの要請に応じて、リーランドがそのまま日本に残った場合を想定するとわが国の体育の様相が一変する事態が生じていたであろうことは容易に想像される。(傍線：筆者)

3. リーランドの明治日本への関心ー「キリスト教布教の実態」に関する報告 ～「日本からの個人的な親しみのこもった手紙」(1880年10月17日付)⁴⁾

リーランドがキリスト教について直に言及した資料はほとんど見かけられない。筆者がこれまでに精力的に資料調査を行ってきた結果、唯一入手できた一点限りの書簡である。この書簡が発せられた時期から推測して、日本ミッションが彼をミッション専属の医師として採

用したい旨の打診をし、ゴードンを経て断りの意志を伝えて来た直後のものと云える。教派から受けた強い要請に対して、それを断ってしまったという良心の呵責と同時に彼自身の目的を達成させたいという強い気持ちが入り交じった複雑な胸の内が容易に想像される。こうした複雑な気持ちを紛らすかの様にボストンで牧師を務める親友であるヘリックに宛て、わが国におけるキリスト教布教の実態を以下の書簡で詳しく述べている。

まず。冒頭部分にこの書簡の性格について述べられている。

「日本からの個人的な、親しみをもった手紙」表題（タイトル）の次に4行程に渡って書簡の主旨が冒頭で述べられている。彼の親しかった友人たちへも配付された模様である。

以下の興味深い記述は、「ボストンのマウント・バーノン教会(1874年9月24日新島襄がアンドーヴァー神学校を卒業して、正規の牧師の資格を与えられた場所。この教会の位置はマサチューセッツ・アヴェニューのチャールズ川に架かっているハーバード橋のボストン側のたもとの東側である。筆者註)の牧師であるヘリック博士宛に、彼の教区民である、東京の国立大学に勤務する医学教授が出した手紙の一部である。

これは内務大臣の要請により友人たちへの個人的な配付に供するものです。印刷はされましたが、出版はされていません。」と説明が付されている。(傍線：筆者)

A PERSONAL, FAMILIAR LETTER FROM JAPAN.

[The following interesting statement is part of a letter addressed to Rev. Dr. Herrick, Pastor of Mount Vernon Church, Boston, by one of his people, who is a Medical Professor in a Government school in Tokio. It is furnished for private distribution among friends, at the request of the Home Secretary. Printed, not published.]

17 KAGA YASHIKI, TOKIO, JAPAN, October 17, 1880.

DEAR MR. HERRICK:

A fortnight or so ago, as we were riding up the Ginza, the main street of Yedo, our attention was drawn by a large crowd around a temporary booth (some are permanent in this country), where a foreigner was evidently offering something for sale. It was an unwonted sight, for no foreigner is permitted to do any business outside of the Concession in Tokio; nor even to live outside, unless he is in the employ of the government, or has special permission for educational purposes. Upon inquiry, I found it was a stand of the agents of the American Bible Society, who up to the 2d instant had sold eighteen thousand copies of parts of the Scriptures, and that, on an average of two hundred copies per day. The only trouble had been that the printers were not able to turn them out fast enough to supply the demand. The cheapest book was a copy of Matthew's Gospel, in the *Kana*, or the simplest and easiest of the methods of writing this language, and sold for 2 sen (cents). This, of course, would not pay for the paper and printing; but it will reach the lowest classes of the people, both by reason of its style and price, and the coolie who will pull you two and a half miles on the trot for 6 to 8 sen, or who gets but 4 yen per month (yen is the Japanese dollar), will be able to own a copy. From this, the books increase in price and style to 10 sen, 25 sen, and 50 sen, the last of which is a copy of the New Testament in Chinese and *Kana*, which mixture seems to be used in general literature; it is the style of the newspapers and magazines, and is read by every one who pretends to education. The highest cost book is the whole Bible in Chinese. This is the manner of writing all scientific

図2 日本からの個人的な親しみのこもった手紙

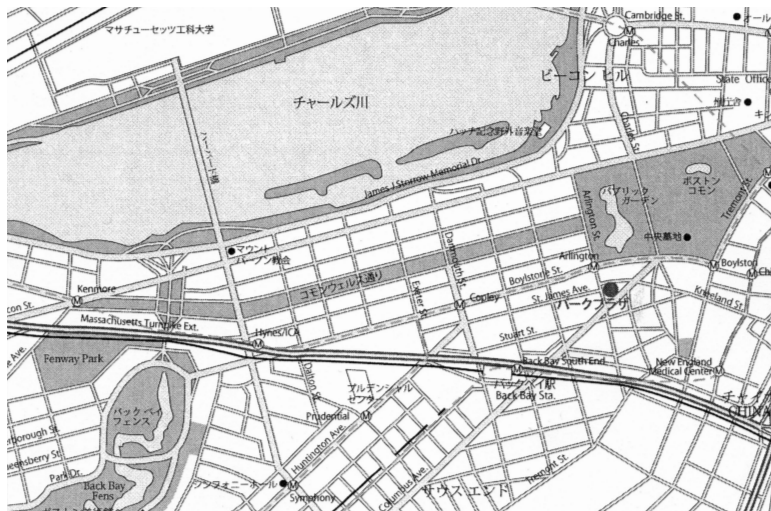


図3 ボストンの市街図

書簡の全容を示すと、およそ以下の通りである。

17 加賀屋敷 1880 年 10 月 17 日 日本、東京にて

拝啓 ヘリック 様

2 週間ほど前に、江戸の大通りである銀座を通っていたとき、私達の注意は、外国人が明らかに何かを売っていると思われる露店（日本では常設している露店もあります）の前の人ばかりに向けられました。それは異様な光景でした。というのも、東京の外国人居留地の外で、外国人が商売することは許されていなかったからです。また、外国人は、政府に雇われているか、教育目的の為の特別な許可を得ていない限り、居留地の外に住むことも許されていませんでした。問い合わせてみて、アメリカ聖書協会の代理人の露店だということが、分かりました。彼等は、一日平均 200 部の聖書を売り、今月 2 日までに 18,000 部が売れました。唯一困ったことは、需要を満たす程早く印刷機が回転しなかったことです。この中で最も安価な本は、日本語の最も平易な表記法である「かな」によって書かれたマタイによる福音書で 1 銭で売られていました。これが紙代、印刷代にもならないのは言うまでもありません。しかしこの表記法と価格のおかげで、最も下層にいる人々の手元にも届き、また 61 / 4 銭で客を 2.5 マイルも走って運んだりする人力車夫や、月にたった 4 円（円は日本のドルに相当）しか得ていない下級労働者も、聖書を手にすることができるのです。これらの本の価値は、その他に、10 銭、25 銭、50 銭などの聖書があり、値段が高くなると共に表記法も高度になり、5 銭のものは、一般的な文献で使用されている漢字・かな交じりで書かれた旧約・新約聖書です。

これは、全ての学術書の表記法で、この聖書は、最も上流階級の教育を受けた人々の注目を集めることを意図していました。というのも、中国語に堪能な優れた学者であることは、最も高度な教育を受けたことの証だからです。偉大な仕事をしたのは、アメリカ聖書協会だけではありません。スコットランド聖書協会も、大きな成功を収め、恐らくアメリカ聖書協会に匹敵するほど偉大な業績を残したと言えるかも知れません。そして今、この大きな成功を喜びながらも、わずか 1 年程前に、宗教書籍行商人が「売れない」とこぼしていたことを思い起こさなければなりません。この「神の御言葉」聖書：筆者注）の大規模な配布が神の教えと導きのもとでどれほど大きな価値を有しているかは計り知れません。日本には、貧しい人々、女性、子供達のための読み物はほとんどありませんし、その本質において、高い道徳性を持ち、精神を高めるような読み物が全くありません。女性には、概して、教育を受けておらず、少しは読めたとしてもせいぜいその程度で、女性向けの本は、妻や母の努めについてだけ扱ったものです。また、子ども向けの物語本は、あまりにも意図的であり、家に置いておく気にもなれません。日本語を専攻している大変立派な若いイギリスの学生が、日本の「ガリヴァー」から「日本のアジア的社会」を抜粋したものを翻訳してくれました。彼は、その他の部分は、あまりにも反道徳的なので、文明国のほんの一握りの人達にしか分らない言語で隠しておいた方がいいと言っていました。日本人は、大変「読書家」です。週に 2、3 度巡回図書が、使徒の住む地区を訪れます。文字通りのこの巡回する図書は、何十冊もの本が大きな緑の布に包まれて、一人か二人の男の背に掛けられて、やって来るのです。そう言った男たちは、町の至とこ

ろで見かけることが出来ます。それなら、このすばらしく売れた聖書の数から、何かを期待しないていることなど出来ましょうか？（傍線：筆者）

現地のキリスト教徒は、宣教師による援助や煽動などによる、高い道徳性を有する読み物の必要性に気づきました。この手紙とともに、今月（10月）11日にその第一号が発刊された月刊の宗教雑誌（『六合雑誌』の創刊号のこと 筆者註）を送ります。編集長は敬愛なる小崎氏で、彼は京都にある外国伝導神学校のアメリカ理事会の昨年の卒業生です。同氏はまたこの立派な市の中心地に13人の信徒からなる教会を持っています。幾人かの現地のキリスト教徒と二人の優れた宣教師であるフルベッキ博士とファウルド博士がこの雑誌に投稿することになっています。お送りした雑誌に、「人間の起源」についてのファウルド博士の記事が載っていることにお気づき頂けるでしょう。彼はモース教授と闘った人であり、日本の「Punch」また「Puck」が、彼に十字架の形を真似た人々に向かって説教させたとされており、双方ともに、互いが間違っていると論争しています。（傍線：筆者）

野外集会

最近東京で建造された教会の牧師である敬愛なる小崎氏が、10日前に私を訪ねてきて、寄稿論文を提供してくれました。見出しは、「日本人のキリスト教徒は、15、20年の発展過程を経て、キリスト教の祝福と慰めとを享受して来たので、自らの立場を知らしめ、はっきりとした姿勢と態度を示す時期が訪れたと考えるに至った」となっています。その様な経緯から、今月11、12日、上野公園（精養軒 筆者註）で説教等の目的で、野外集会を開くことが決定されました。（傍線：筆者）

精養軒の敷地が借り上げられました。というのもこのホテルは、政府の非常に重要な部局である「開拓使」の長官である黒田氏によって所有・経営されているからです。また東京市は、中央政府と同様、その様な集会の可能性を保証するために、許可もしくは無関心を示さなければなりません。両当局は、また東京で最も大きな仏教寺の比較的高い地位にある僧侶が、キリスト教徒の野外集会を妨害するのではないかと恐れていましたが、その様なことはありませんでした。また集会の2日目に音楽を提供するために、当局は海軍の楽団を雇いましたが、結局、楽団は現われませんでした。小崎氏が言うには、当局は、その様な友好の情は公には示したくないということです。11日がやって来て、雨の日となりました。そのため野外集会が実行不可能となりましたが、一つのお話だけはほとんど最後まで行われ、傘をさした聴衆が聞き入りました。集会は引き続き大きな食堂で開かれることになり、満員の衆の中で説教が何時間も続けられました。翌日は、比較的天候に恵まれましたが、その時期いつもそうであるほど心地よい天気ではありませんでした。野外集会は、午前9時から12時まで、そして午後1時から5時まで開かれました。私どもは2時30分頃に訪れました。会場に向かっていたとき、夥しい数の人力車と人だかりが、何か常ならぬ興味深いことが起こっていることを示していました。さらに後方には、おそらく長さ8フィートの、幅2.5フィートの大きな白い布があって、そこには縦書きで「イエスの宗教・偉大なる説教の会場」と書かれていました。この布の丁度下で、一人の日本人の大きな声がし、私達の注目はそこに集まりました。その人は、石段の頂上から多くの人に向かって、ひどく真剣に話しをしていました。彼

の頭上には、大きなブロンズ製の仏像があって、彼を静かに見下ろしていました。高さ15フィートもあろうかというその仏像は、円光の代わりとして、頭の後におおきな金輪をつけていました。しかしこれは会場から溢れ出たものたちの集会といった様なものでした。さらに遠くの方に会場があったのです。横浜のコーレル（メソジスト監督教会の教師。1873年6月来日。当時は横浜美会神学校（後に青山学院と改めた。）の教授であった。筆者註）さんという方が、説教をしていました。私の側にいた宣教師が、次の引用を同時通訳してくれました。「なにびとも未来を知ることはできない。」しかしまあ、なんという興味深い聴衆でしょう！前部の席には、何百人もの女子生徒、すなわち以前手紙に書いた伝道女学校の学生がいました。制服を着て武器を携帯している兵士、ゆったり垂れた奇妙な色の職服を着て、頭を剃った異教徒の僧侶、やはり頭を丸めた未亡人、お歯黒の既婚女性、鮮やかな色の服を着キリスト教徒である津田氏がそこにいる人々の数を推測して欲しいと私に頼みました。私は「2千人だよ」といいました。彼は「ああ、そうだね。」もし彼らが皆外国人だったら君の言うとおりでだろう。でも日本人は非常に礼儀正しい国民で、互いに非常に接近して座ることができるから、3千人いると見ていいよ。」と言いました。午後になって、礼拝のある部分に出席した人々は、4千人以上いると推定されました。（傍線：筆者）

コーレル氏のお話の後、「戴冠式」が英語で歌われました。外国人の宣教師達からなる壇上の大聖歌隊が豊かな音色で「全ての人の主キリストに冠を」と歌って、最高潮に達した時このモンゴル人の主催者の感情は溢れだし感激の余り気絶しそうになりました。しかし音楽会での試みの様な音楽的なものはありませんでした。おそらく貴方は、どの様な感情がこの歌によって呼び覚まされたか想像がつくでしょう。それから私たちの友である平岩氏（体操伝習所で、理科担当兼務を命ぜられ、他に体育学も講義した。筆者註）が紹介されました。外国人のお話を聞くと言うアトラクションが終わり、何百人かの人々が立ち去りましたが、其れでも尚多くの聴衆が残っていました。おそらく2千5百人位いたと思います。彼のお話の間中ずっと、誰もが静かに整然としており、妨害も反対行動もなく、皆が注意を向けていました。そして、平岩氏が着席すると、聴衆は皆、深々とお辞儀をしました。（傍線：筆者）

その日は、多くの聖書や宗教書が売られ、何千もの小冊子が配布されました。政府がこの様な集会を開くことを許可し、また公共の印刷機がキリスト教のために使用されることや、日刊紙に広告が載ることを許可し、先に述べた様なこと全てが今実際に起こっているこのときに、感謝の念とともに喜び表わすことがふさわしくないということがありませんか？

敬具

G. A. リーランド

尚、書簡の最後にこれを受けたボストンのミッション本部の幹事 E. K. オルデンの名でコメントが付されている。

日本のキリスト教徒たち、また宣教師協会とは正式には関わりを持たないが、キリスト

教徒の行動に心からの共感を抱き、大日本帝国中にキリストの王国を広めようと尽力して
いる国公立学校の教師たちのことを、どうか心にお留め置き下さい。（傍線：筆者）

E. K. オルデン

（アメリカン・ボード幹事）

ボストン Missionary Roomsより

1880 年 12 月

リーランドは、当時日本におけるキリスト教布教の実態を、以下の様に捉えていたことがわかる。

一つには、聖書が短期間に余りにも驚異的な売り上げを示したことに大変な驚きを持って捉えていた。その理由として、下層階級の人々にも容易に入手できる安価な値段であったこと、「かな」書きで読み易い内容であったことなどが考えられた。

二つには、日本には貧しい人々、女性、子供たち向けの高い道德性を持ち、精神を高めるような読み物が、明らかに不足していたが聖書の配布により一気にこれが解消される様になった。

三つには、聖書の印刷・出版はアメリカ聖書協会とスコットランド聖書協会が手がけた。

四つには、現地のキリスト教徒は、宣教師による援助や煽動などによる高い道德性を有する読み物の必要性に気づいた。10月11日に月刊の宗教雑誌『六合雑誌』が創刊された。編集著は、小崎弘道（同志社卒業生）であった。二人の優れた宣教師であるフルベッキとファウルド（「人間の起源」について、モースと論争をした人物）がこの雑誌に寄稿していた。

最後に10月11、12日の両日上野公園で説教を目的とした野外集会が開催された。壇上には横浜のコーレルが立ち、説教の後平岩愼保が紹介された。政府が、集会を開くことを許可し、公共の印刷機がキリスト教の為に使用されることや、日刊紙に広告が掲載されることを許可した寛容な態度に対して感謝の念と共に喜びを表わしていた。

また、彼の書簡を受け取ったアメリカン・ボード幹事オルデンの付記にも明らかな様に、直接キリスト教の宣教活動が主たる任務ではなかったリーランドの様なお雇い外国人教師たちも常に日本でのキリスト教布教活動には深い関心を持ち続けていた事が窺える。

4. S. E. ヘリックとリーランド

1) ヘリック博士について

これまでの資料調査においては、リーランドが日本に滞在中の1880年10月、加賀屋敷から親しみを込めて手紙を送った相手であるヘリック博士に関する詳細は、不明であった。しかし昨年（2008年9月）筆者がアマーフトを訪れた際に、かつてアマーフト大学スペシャル・コレクションズの責任者であったダリア氏から懇切なる資料提供を受けた。これによってこれまで抱いていた疑問は、一気に解決することが可能となった。当大学に所蔵されている“Amherst College Biographical Record” 1973,⁵⁾ によれば以下の通りである。

ヘリックとアマーフト大学の関係は非常に関わりが深く、大学院においてそれぞれ修士号、博士号の学位を取得している。専門である神学を学ぶ傍ら、聖職者としての資格を得て、1868年以降は、長老派教会、組合教会において、牧師を務めている。また1890年には、大

学の同窓会の教派を代表する会長職も務めている。

ヘリック・サミュエル・エドワード (Herrick, Samuel Edward) 略年譜

- 1841 年 4 月 6 日 ニューヨーク州サウザンプトンに生まれる。
 - 1856 ～ 59 年 サウザンプトン・アカデミー卒業
 - 1859 ～ 61 年 ニュージャージー州オレンジ郡で教職に就く。
 - 1861 ～ 63 年 プリンストン神学校において学ぶ。
 - 1862 年 アマースト大学文学修士取得。
 - 1863 年 10 月 13 日 聖職を授与される。
 - 1863 ～ 64 年 ニューヨーク州のワッピンガーズ・フォールズ長老会派教会に
在職する。
 - 1864 ～ 71 年 チェルシーのブロードウェイ・Congregational (組合) 教会に
在職する。
 - 1871 ～ 1904 年 ボストンのマウント・バーノン教会に在職する。
 - 1878 年 アマースト大学神学博士号を取得する。
 - 1890 年 アマースト大学長老派同窓会会長に就任する。
 - 1898 年 5 月 29 日 『William Seymour Tyler の追憶』 (アマースト大学教会) を
発表する。
 - 1904 年 12 月 4 日 ボストンにて死去する。
- 主な著作物 『過去の異教徒』 『12 ～ 18 世紀の宗教活動』 『中世の布教活動』 etc.

さらにヘリックとアマースト大学を結びつける強固な状況証拠が見つっている。

昨年資料調査で立ち寄ったボストン・パブリックライブラリーにおいて、下記のタイトル名の刊本が発見された。これは『タイラー教授の追憶』(“An address in memory of William Seymour Tyler : delivered in the college church at Amherst, May 29 . 1898”)⁶⁾ と題されたものであり、彼の業績、大学で担当した講義及び教会で行った説教等が取り上げられている。A 5 版, 全 28 ページ, アマースト大学教会によって刊行されたものである。タイラー教授は、1830 年度アマースト大学の卒業生であり、大学では主に古典語を教えていた。新島が在学中、タイラーからギリシア語を習ったかは定かではないが、彼の説教は何度か聞いた筈である。彼は理事会の委嘱を受けて、1895 年『アマースト大学 50 年史』を編纂している。

2) 帰国後の交流

リーランドとの親密な交流は帰国した後も継続して続いていた模様である。リーランド文書の中で、書簡の部の後半に納められている。

1902 年 8 月 10 日付の書簡で、ダートマス大学医学部に集中講義の為出講した際に、ニューハンプシャー州ハノーバーに滞在したリーランドからヘリック博士に宛てて提出されたものであった。

ヘリック博士宛書簡（1902年8月10日）⁷⁾

1902年8月10日 ハノーバー

拝啓 ヘリック博士

今週目に留まった Clyde Fritch の切り抜きを何点か同封致しました。その中の一点は貴方のかつての教区民たちの切り抜きですが、他に全く興味を引くものでなければ少なくとも貴方にとって微笑ましいものなのかもしれません。

現在私は、ダートマス・メディカルスクールの毎年恒例の勤務でこちらに来ております。風光明媚な場所で、今までのところ今年の夏は非常に心地よく過ごしております。こちらに来てから10日目なのですが、あと4日で勤務終了となります。是非充実した夏休みをお過ごしになって次学期に備えて十分健康を維持されることを願っております。貴方の経験則がどのようにして発表されたのか存じ上げておりませんが、耳に入っていないことからおそらく厄介なことにはなっていないのだと「考えております」

ご多幸をお祈りしております

敬具

G. A. リーランド

今週見て特に関心を引いたクライド川（スコットランド南部の川）の入江に関する記事の切り抜きを何点か同封致しました。その中の一点は貴方のかつての区民たちのものをお送りしましたが、非常に興味があるものであれば満足していただけるかもしれません。毎年恒例の夏季休暇期間中の集中講義で、二週間前ダートマス大学医学部に出講した先からヘリック博士宛に暑中見舞いを投函しております。今夏は今のところ非常に気持ちよく過ごしております。貴方もどうか、来期に備えて十分健康に留意され、充実した夏休みを過ごされる様に願っています。貴方が実際の経験から発見された法則がどのようなものは理解しかねますが、実際に私の耳に入っていないことからすると、特に問題は起っていないと思っています。

と述べ相手の健康を十分に気づかった親友としての二人の間柄が偲ばれる文であると云える。残念ながら今のところリーランド文書に収められている書簡の中では、本稿で取り上げた二件のみに限られている。

おわりに

すでに見てきた様に（1）お雇い外国人教師 G. A. リーランドを体操教師としてわが国へ招聘・任免する際に、日米両国間の公式交渉ルート以外に一宣教団体によるアメリカン・ボードが深く関与していた事実が窺える。

この宣教団体はお雇い外国人教師の推薦（＝人選）、派遣の働きかけや新たな人事配置、雇用期間の継続等に及ぶさまざまな場面において、大きな影響力を持っていた事実が明らかになった。時としてボードが寄せる要求や意向は、正式な日本政府と相手機関との交渉よりも強力な権限を持ち、両者の計画を左右する程の大きな力を持っていた。

(2) わが国に招聘されたお雇い外国人の一人であるリーランドがキリスト教布教のどのような点に関心を持ったのか、次に米国本国に何を伝えていたかが実際の報告に基づいて整理すると凡そ以下の様にまとめることができる。滞在期間がわずか二年という短期間にもかかわらず実に詳細な情報を収集、提供していたことが判る。具体的には①聖書が出版されて短期間にもかかわらず余りにも驚異的な売り上げを示したことに大きな驚きを持って捉えていた。②日本では貧しい人々、女性、子供たち向けの道徳性に富んだ、精神を高めるような読み物が不足していたが、聖書を配布したことによりこうした弊害が一気に解消された。③聖書の印刷、出版はアメリカ聖書協会とスコットランド聖書協会が手がけた。④現地のキリスト教徒は、宣教師が行う援助や煽動による高い道徳性のある読み物の必要性に気づいた。10月11日、月刊『六合雑誌』（編集長 小崎弘道）創刊された。⑤10月11、12日説教を目的とした野外集会在開催された。政府が集会開催を許可し、印刷物や日刊紙にキリスト教の広告掲載を許可した寛容な態度に感謝の念と喜びを表わしていた。

書簡の最後に、これを受け取ったボストンのミッション本部の幹事E. K. オルデンが付したコメントに述べられている様に、アメリカン・ボードとは直接的に関係していないけれどもキリスト教徒が採る行動に同意し、日本国内にキリスト教を布教しようと力を尽くしているお雇い外国人教師たちが実在することをしっかり記憶してほしいことを伝えている。

以上の様に、本人は契約上の制約もあってキリスト教布教に関して積極的に関わる方法ではないが、これを側面から援助をする形で、キリスト教布教が極めて順調に進展している模様を忠実に報告していたことが明らかになった。お雇い外国人教師が担ったもう一つの役割として付け加えることができる。

注

- 1) 北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』、山口書店、1993、p.293
- 2) 安田寛『「唱歌」という奇跡 十二の物語』、文春新書、2003、pp.18 - 19
- 3) 同志社大学人文科学研究所『アメリカン・ボード宣教師文書資料一覧』、1993、M. L. ゴードン書簡、Roll 86
- 4) Leland Bio Files, Archives and Special Collection, Amherst College Library, pp.374 - 376
- 5) The Trustees of Amherst College, Amherst College Biographical Records 1973, Biographical Record of the Graduate and non-graduates of the classes of 1822-1971 in clusive, pp.91
- 6) Boston Public Library, An address in memory of William Seymour Tyler : delivered in the college church at Amherst, May 29 . 1898, pp.28
- 7) Leland Bio Files, Archives and Special Collections, Amherst College Library, pp.324 - 325

尚、書簡文の判読が大変に難解であった為に、解説をお願いしご協力を頂いた山城俊昭氏、ノーマン・ロジャー氏（ロンドン在住）には記してお礼申し上げます。

- * W.J.Holland (1848 - 1932) 新島襄はアマースト大学の学寮で3年間を過ごした。ルームメイトは、2年目がW.J.ホランドであった。彼は新島より5歳年下であった。信仰の点からみて、また趣味からいっても、新島はホランドとの親交を最も楽しんだ様である。ホランドはアマースト大学を卒業後は、諸学校の校長、牧師などを務めた。後にウエスト・ベンシルヴァニア大学（現ピッツバーグ大学）の学長、博物館長に就任した。1887年、日食観察のため来日した際、新島を京都に訪ねた。